岩見沢が病院再編の先行モデルになるか

岩見沢市医師会
ささえるクリニック岩見沢　永森克志（ながもりかつし）

岩見沢市では、岩見沢市立総合病院と北海道中央労災病院が2026年４月に経営統合し、地域医療再編の先行事例となりました。

背景には南空知医療圏の人口減少・高齢化、両病院の赤字継続、施設老朽化の３課題がありました。

統合前の許可病床数は計683床でしたが、統合時に405床へ縮小し、2028年秋開院予定の新病院では358床まで減らす計画です。

一方で診療科は15科から22科に増やし、単なる縮小ではなく急性期医療機能の集約と高度化を図っています。

つまり、高度化しながらコンパクト化したのです。

実績ベースでは両院合計の平均入院患者数が362名であり、病床削減は需要に見合った規模と判断したようです。

特徴的なのは、新病院完成を待たず統合を２年半前倒しした点です。通常は新病院完成後に統合しますが、別々の経営継続では赤字が拡大するため、先行統合を選択しました。これにより人員や設備を早期に一本化し、経営効率化を進めています。

成功の背景には、厚生労働省と北海道による重点支援区域指定もありました。技術支援や財政支援を受け、異なる経営主体の統合を後押ししました。

また、希望する職員全員の雇用維持を条件にしたことで、職員の不安を抑え円滑な移行を実現しました。

国レベルで、地域医療構想を巡り、「公立・公的医療機関等の具体的対応方針の再検証の再編統合の議論が必要な公立・公的病院、いわゆる「424リスト」が公表されています。

まさに、この事例は、地方中核医療圏における急性期集約＋病床再編のモデルケースであり、医療圏全体の需要に合わせた再設計です。

北海道の総人口は2025年国勢調査速報値では498万5,419人でした。1955年以来、70年ぶりに500万人を下回りました。

このような時代だからこそ、岩見沢が病院再編の先行モデルになり、今後他地域にも波及する可能性が高いと思います。

岩見沢がこのような先駆的な動きになったのは、市立総合病院の髙橋院長、松野岩見沢市長らの力もありますが、岩見沢市医師会と市、病院との関係が良好なことも一因だと思っています。

つながりというチーム力・地域力も大事な時代になってきたと思います。

世界に話しかける娘

空知南部医師会
国民健康保険由仁町立診療所　千葉慶宜（ちばよしき）

我が家には二人の娘がいる。下の子は１歳、上の子はもうすぐ４歳になる。上の子が生まれた頃、夫婦で将来の教育について話し合う機会があった。その中で、特に話題になったのが英語教育である。

私も妻も受験期には英語の勉強に多くの時間を費やしたが、決して得意科目ではなかった。一方、大学時代には英語を流暢に話す同級生がおり、その姿に羨望を抱いていたこともある。これからのグローバル社会を考えると、幼少期から英語に親しむことで、将来の受験や就職の際に少しでも娘たちの選択肢が広がればと思った。そこで思い切ってディズニー英語システム（DWE）を購入し、いわゆる「おうち英語」を始めた。「継続は力なり」という言葉を信じて、自宅のテレビには受信ケーブルをつながず、日常的に英語教材や英語の映像を流し続けた。正直なところ、最初は半信半疑であったが、継続の力は予想以上だった。

現在、上の娘は家族の誰よりも英語を話す。海外向けの英語アニメを字幕なしで楽しみ、英語を話す外国人ハーフのお友達と遊ぶ中で自然に表現を身につけている。花見で訪れた公園では偶然出会ったスペイン人に積極的に話しかけ、飲食店では隣席の外国人カップルと会話を始めたこともあった。英語力そのものも驚きだが、それ以上に言葉を通じて人と関わろうとする姿勢が興味深い。もっとも、娘の成長に置いていかれないよう、私と妻のほうが英語の勉強に追われているのが実情である。もちろん向き不向きはあるだろうが、少なくとも娘にとって英語は相性の良い分野だったように思う。

一方で、幼少期に身につけた英語は学習が途切れると失われやすいとも聞く。留学経験のある上司から、帰国後に子どもが英語を話さなくなったという話を聞いたこともある。結局のところ、英語に限らず教育で大切なのは、その子が興味を持てるものに触れ続けられる環境を整えることではないだろうか。

幸い娘は今のところ英語を楽しんでいる。親としては成果を求めるよりも、まずは「楽しい」という気持ちを大切にしながら、これからも自然に英語に触れられる環境づくりを続けていきたい。